

## 名作再読、拾い読み (34)

### 『ワインズバーグ・オハイオ』〔1〕 (“Winesburg, Ohio”)

小澤文彦

シャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) はアメリカの作家で、オハイオ州カムデンに生まれました。馬具商の父親は機械化の波に押されて時代遅れとなった商売が振るわず、オハイオ州内を転々とシクライドという小さな町に落ち着きました。しかし、母親が過労で倒れたため、アンダーソンの家族は一家離散となります。高校を中退して約1年間の軍隊生活を送った後、様々な職種を経験し、24歳の時、シカゴの広告会社にコピーライターとして就職。1906年に宣伝会社の社長を務め、実業家として成功。翌年には独立して塗料販売会社を設立しましたが、事業の不振と創作活動に専念したいという欲求から心労が重なって1912年11月に突然会社から姿を消し、4日後に朦朧状態で発見されるという謎の失踪事件を起こします。1913年、シカゴに移ったアンダーソンは広告の仕事しながらフロイド・デル、カール・サンドバーグ、セオドア・ドライサーらと知り合いになり、執筆活動を開始しました。

1919年、オハイオ州の小さな田舎町を舞台にした『ワインズバーグ・オハイオ』を発表したところ評判を呼び、一躍有名作家となります。その後も、結婚・離婚を繰り返しながら『卵の勝利』(1912)、『馬と人間』(1923)などの短編集を発表しました。1941年、国務省の委任で南アメリカへ親善使節として旅行中に、腹膜炎に罹って亡くなります。64歳でした。

彼の作品としては、他に、長編『多くの結婚』(1923)、長編『黒い笑い』(1925)、短編集『森の中の死』(1933)、詩集『中西部アメリカの歌』(1918)があります。アンダーソンがアメリカ文学史において占める位置は大きく、ウィリアム・フォークナーは彼を「我々の世代のあらゆる作家の父親である」と評し、彼の影響を受けた作家としては、アーネスト・ヘミングウェイ、ジョン・スタインベック、トマス・ウルフ、レイモンド・カーヴァーなどの名前が挙げられます。

今回は『ワインズバーグ・オハイオ』を紹介します。この作品は、25の短編が積み重なって一つの長編小説を形作っており、その大部分に登場する新聞記者ジョージ・ウィラードという青年が作品全体の主人公です。彼がワインズバー

グの町の人々と様々な関係を結びながら愛と死を経験し、より広い社会を見るために町を離れるという成長の過程を辿った一種の青春小説とも言えるでしょう。

ジョージ・ウィラードは記者として人々と接していくうちに、ルイズ・トラニアンから誘惑されて性体験をし、バーテンダーの恋人であるベル・カーペンターに言い寄られて三角関係を経験したりするのですが、銀行家の娘ヘレン・ホワイトとは清らかな恋愛関係を続けます。しかし、母の死を切っ掛けにしてワインズバーグを離れる決心をし、4月の早朝に静けさに包まれた懐かしい町の中を散歩してから、午前7時45分の列車に乗って都会へと旅立ちます。

この小説に登場する人々の殆どが、何らかの挫折感を味わったり、心に傷を負っていたり、孤独感に襲われたりしています。普通でない人々が扱われているのは、最初のエピソード『奇怪な(グロテスクな)人々に関する書』に記されている老作家の本の内容に関係があり、そこにアンダーソンの意図が示されているのでしょう。簡単に纏めれば次のようになります。

《世界には人間によって作り出された真理が無数に存在していた。真理はすべて美しかった。そこへ人間がやってきて、その真理の一つを、あるいは幾つもの真理を掴み取って行き、それを自分の真理だと主張し、それによって人生を送ろうとする。するとその途端に、真理を掴み取った人間はすべてグロテスクに変貌する。》

人間は誰でも多少は偏ったり歪んだりするのが当たり前であり、真理を掴んだ結果のグロテスクさがその人に真の人生を生きさせると述べているようです。そのため、小説の中に登場する奇人・変人や社会からはみ出した人達に対して、彼の眼差しは温かく感じられます。

(次号へ続く)

#### 参考文献

1. Sherwood Anderson “Winesburg, Ohio” (Viking Press, 1960)
2. アンダーソン著 金崎寿夫訳 『ワインズバーグ・オハイオ』<世界文学全集31:『南回帰線』/ミラー:『ワインズバーグ・オハイオ』/アンダーソン(集英社、1974)より>

おざわ ふみひこ (情報サービス課)